

平成 28・29 年度 第 2 回 神奈川県産業教育審議会概要  
平成 29 年 3 月 21 日 (火) 14:00~16:00 神奈川県庁新庁舎 5 B 会議室

【出席者】◎河野 隆二、○角田 浩子、二見 稔、村木 薫、馬鳥 敦、松本 里香、  
本田 由紀、目迫 公雄、廣瀬 道、佐藤 均、後藤 宗治、大平 雅子、奥田 裕之

1 事務連絡（事務局）

- ◇資料確認
- ◇定数確認
- ◇会議の公開について

2 神奈川県教育委員会あいさつ（折笠指導部長）

- ・ 県立高校改革のⅡ期以降の計画において、産業教育審議会の意義というのが大変大きなものになる。
- ・ 現在、2校を指定してコンソーシアムのモデル作りに取り組んでおり、効果的な教育課程がどうあるべきか、研究を進めていく。
- ・ 高校生の就職内定率は前年同期を若干下回っているが、これまでも専門学科は高い内定率を維持している。
- ・ 各専門高校の代表校が自分たちの取組内容をプレゼンテーションする「専門高校研究・実践活動発表会」を開催している。
- ・ 1月下旬に一般社団法人神奈川県建設業協会の方から工業高校に対して、建設系コースを新設していただきたいという要望が、教育長のところにあった。県産審の議論の場において、建設系学科の教育内容の充実についてご審議願いたい。

3 会長あいさつ（河野会長）

- ・ 専門高校としての専門性や即戦力として期待されるために教育はどうあるべきか議論したいと思っている。
- ・ 神奈川工科大学では、普通高校に比べ専門高校出身の学生の方が優秀な生徒の割合が多いが、中退率も高い。その辺も今後の検討審議としたいと思っている。
- ・ 「専門高校に求められる人材育成のあり方」について、中間まとめで論点整理が提出されている。集中的なご審議とご意見をいただき、実りある審議会としたい。

4 前回の審議会欠席者あいさつ

- ◇二見委員及び奥田委員による自己紹介

5 専門部会委員・専門員の決定に関する報告について（河野会長）

- ◇各委員・専門員の決定について
- ◇専門部会長及び副部会長の選出について

## 6 第1回専門部会、第2回専門部会の報告について（後藤委員）

- ・第1回は、今後のスケジュールを確認し、神奈川で求められる専門学科について意見を出し合って情報展開した。
- ・第2回は、中間報告のまとめを受け、中学生が感じる課題や産業界が求める人材について専門高校としてどのように考えたらよいか議論した。

## 7 県立高校改革実施計画に係る専門高校のあり方中間まとめ（案）について（事務局）

- ・Ⅰ．本県の専門高校に求められる役割について、具体的な国の動きや本県の専門高校の編成、改革等行ってきた具体的な内容について記載している。今後、当時中学生だった高校1年生に対して、アンケート調査をしながら、専門高校のニーズを確認したいと考えている。
- ・Ⅱ．本県の専門高校における学習機会のあり方について、現在行われている県立高校改革の中で、県立高校生学習活動コンソーシアム形成に向けた具体的な取組内容等を掲載している。また、次期学習指導要領に向けた中教審の答申に係る専門教育に関する内容を記載した。
- ・Ⅲ．本県のこれからの専門高校のあり方について、それぞれ学科の現状と課題、具体的な方策についてお示しした。神奈川県内に設置されている職に関する専門学科に関しての方向性について、ご覧いただきたい。

## 8 審議

### （1）本県の専門高校に求められる役割について

#### （河野会長）

- ・本日は、この資料を中心に審議を行いたいと思う。最初にⅠ．本県の専門高校に求められる役割について、ご意見ご質問等をお願いしたい。

#### （佐藤委員）

- ・地域産業のニーズという部分では、後継者の育成、担い手という点で地域産業と密着した部分が、役割としては重いのではないかと。
- ・中学校は市町村立なので、市町村の実態に合った進路という意味で、地域に密着した後継者を育てるという意味での役割が非常に大きい。
- ・かつては専門高校も地域とかなり密着していた。是非復活してほしいという願いはある。

#### （本田委員）

- ・求められる役割というのが、専門高校を卒業した後に、どうなっていくかという所に力点を置かれ、書かれている。
- ・しかし、専門学科にはさまざまなニーズを持った生徒がいる。
- ・例えば、非常に特定の分野に早くから関心を示していて、進学も含めて高い能力を発揮したいと志望がはっきりしている生徒もいるし、他方では、経済状況が厳しい中で、堅実な仕事に早く就きたいという生徒もいる。また、普通科目の学習にあまり関心を持ってないで、ちょっと学力的に問題があったりしてきている生徒がいるかもしれない。
- ・そういう様々な生徒たちに応え、より確実な将来を提供していくというのも専門高校の重要な役割だと思う。そういう書き方をしていただけないか。

(後藤委員)

- ・様々な状況の生徒が入学してくる中で、生徒の志望を実現するための書き方というのをスチューデント・ファーストで考えれば、必要なのではないか。
- ・入学してきた生徒たちを自立させて、また、伸ばしていくという、専門教育の内容について書いていただくとありがたい。

(河野会長)

- ・多様化する学生と希望についての専門高校における対応というのは現状の問題としてどうでしょう。

(後藤委員)

- ・現状の問題としては、専門学科高校では生徒たちの希望と将来の進路について、入学した当初からキャリア教育をかなりやっているの、それはしっかりと踏まえている。
- ・しかし、自分はこの道ではなかったという子どもたちは現実にはいるので、そこは軌道修正などを含めて、現場で苦労しながらやっていく。

(河野会長)

- ・多様化に対する多様のシステムと、後は先生方の資質と二つある。多様化する生徒に対してのシステムは存在するのだろうか。

(大平委員)

- ・多様化ということで、入学してから悩む生徒も多いかと思う。
- ・商業科においては、以前は、科ごとに募集していたが、総合ビジネス科に学科改編し、専門性を決めすぎずに、入学してから選べるというような、柔軟なシステムになっている。
- ・ミスマッチが生じるということは、ゼロではないと思う。商業高校においても、やっぱりそういうところはある。普通科の勉強も専門高校はやっており、そういうところで次のステップに向けて、何らかの手立てをしていく形を教員の方ではさせていただいている。

(河野会長)

- ・記載が入った方がよいとの意見だったと思うが、それについてのご意見はあるか。

(折笠指導部長)

- ・専門高校で校長をしていたとき、高い学力で、進学校に行けるであろうという生徒が、その分野をやりたいということで入学してくる場合があった。
- ・しかし、授業については例えば普通科目の英語やそういった科目が、要求水準に応えられているか、そういったところにもちゃんと光を当てていったほうが、もっと専門高校でこれをやりたいという生徒が入ってくる。先に繋がるものが見えてくればと思う。

(河野会長)

- ・それでは、これは記載の方向で検討していただくということをお願いする。

(馬鳥委員)

- ・「本県の専門高校に求められる役割」の記載のなかに、即戦力という言葉が出てくるが、神奈川の専門高校のあり方を考えるキーワードのひとつと思っている。
- ・その言葉の使い方、定義を含めて、どのように考えればいいのかということであるが、中間まとめ案には、「基本的な知識や技術を有し、即戦力のある人材、これが（高校卒業程度）」と記載されている。一方、「高度な知識、技術を有し、幅広い業務に対応できる人材（大

学・短大卒程度)」と記載されている。

- ・ここで専門高校の卒業生に求められるのは、即戦力ということであるが、目まぐるしく変化している時代のなかで、果たして即戦力というのは何なのか。
- ・その時の即戦力は、時代が変われば古くなる。やはりこの即戦力という言葉は、慎重にきちんと定義したうえで使わないといけない。
- ・専門高校の卒業生というのは、ある意味で言うと使い捨てではないが、そういうような形での人材育成だということにもなりかねないと思う。
- ・専門部会ではどのような検討が行われているか。

(後藤委員)

- ・専門部会で考える即戦力は、非常に難しいテーマではあるが、専門学校や企業で行っているような技能スキル、職業技術校で行っているような技能スキル、現代の最先端の技術、技能に即した即戦力と考えると、現在の専門学科高校における技能、技術では非常に難しい。
- ・専門学科高校における即戦力というのは、スキルと同時に、1年生から実験実習を通じて様々なコミュニケーションを取りながら、自分の考えをまとめたり、発表したりという機会を通じてその専門に対する意欲や、姿勢、人の意見を聞いて自分なりに判断して、様々な状況の中で行動、対応ができることだと考える。

(大平委員)

- ・商業でいう即戦力というのは、社会人になるために必要なことがらを、3年間の授業、教育活動を通してしっかりと身につけさせ、社会にすぐ出て働くということが身についた生徒と捉えている。
- ・私自身はずっと普通科でやっていたので、商業高校というところが専門高校初めての経験となるが、普通科との違いをそういったところで感じている。

(河野会長)

- ・中途採用でがらがん仕事をやっている人を即戦力という言い方をするのが一般的であり、そういうことから言うと、今のご説明も社会にすっと入れる、いわゆる普通高校とは少し違うという話の部分で言うと、誤解は確かにあるかもしれない。それとも、それはそれで一般的な言葉として捉えてよいのか。

(松本委員)

- ・私もお話を聞いていると、即戦力という言葉とは少し一般に受けるイメージと違うのかなど思っている。社会人として仕事に対する、普通の高校生とは違うという話なので、即戦力だと最新技術が身につけているようなイメージを持ってしまう。

(馬鳥委員)

- ・普通高校に対して専門高校で即戦力ということは理解できる。しかし、この中間まとめ案で言うと、大学・短大等に対して専門高校が即戦力というのは、今のみなさんのお話だと、大学・短大の卒業者にそういうものが求められるわけであり、即戦力という言葉に違和感を持つ。

(二見委員)

- ・私も企業の採用担当として、大卒・高卒採用、新卒以外の採用をやったことがある。大卒であっても高卒であっても「即戦力」とは、いわゆる即、仕事で使える方がほしいということ

であって、新規高校卒の専門高校のところで「即戦力」という言葉を使うのはふさわしくないと考える。

- ・どちらかというところ、現場の実務に長けたスキル、頭でっかちでない実学に近いところのスキル、そういうところをしっかりと身につけた生徒を採用したいと思っていたし、コミュニケーション力やパワーのある人材を高卒の人たちには期待してきたような思いがある。
- ・逆に、大学卒になってくると、構想力であるとか創造力であるとか、そういったところを求めているような気がする。
- ・専門高校生が参加する産業教育フェアなどを見ると、工業高校の生徒さんたちがいろんな機械装置を作ったりしている。非常にその実務的な力の高さが分かる。それは、専門高校生に必ず身につけてきてもらいたい基礎力なのではないかと思っている。
- ・したがって、「即戦力」という言葉は、あまり適当でないような気がする。むしろ、そういった現場に近いところでの実務能力、洞察力、そういう感じの言葉の方が狙いが見えてくるのかと思う。

(角田副会長)

- ・個人的な考えで言うと、即戦力という言葉はちょっとイメージ的にもう悪くなってきたかなという感じがしている。戦力という言葉自体もそう思う。
- ・今は働く人が幸せに、自分の個性を生かしてという時代なので、企業目線のそういった言葉は変えていったほうが良いと思う。
- ・それともう一点提案させていただきたい。人材育成というスタンスで全部書かれているが、在学中の専門高校生も素晴らしいと思っている、いつも取材させていただいていると、商店街を活性化させたり、モノづくりで地域に貢献していたり、専門高校ならではの、すでに学んでいる内容を生かした高校生ならではの地域貢献をしている高校が増えている。
- ・まだまだ未熟かもしれないけれども、自分たちが学んだことで地域貢献していくということを専門高校が果たす役割の中に含めたらいいのではと思っている。

(2) 本県の専門高校における学習機会のあり方について

(河野会長)

- ・つぎにⅡ. 本県の専門高校における学習機会のあり方について、ご意見ご質問等をお願いしたい。

(目迫委員)

- ・コンソーシアム構築について、前回も質問させていただいている。
- ・趣旨や方向性は理解したつもりでいる。今後、大学等の教育機関、企業等団体と連携し、学習機会を設ける。そこまでは素晴らしいと思う。
- ・これから、モデル校2校が試行錯誤して構築するという形なのだが、例えば科学技術というテーマについて、それをある高校が大学等教育機関とか企業とやろうと思うのだが、現場の先生方、生徒さんがどう関わるか。
- ・いまはモデル校がやっているから試行錯誤の部分は大事なのだが、最終的には全ての学校でやるという方向性があるから、そこをきちんと整理したうえで、やるのがいい。
- ・絵に描いた餅にならないような形にするにはどうかというのを、試行錯誤のうちに模索した

方がいいと思う。

(河野会長)

- ・これについて、現状を報告できるか。

(岡野高校教育課長)

- ・ご指摘のように、今年度 11 月の末に連携協定を結んで、実はこの会議のあとに今日、追加でいくつか大学や企業の方と協定を結ぶのだが、やっとまずは骨組みができたというところである。
- ・今、各連携先をお願いしているのは、高校側から「こんなことできないか」というよりも、大学とか企業などから「こんなことができます」というプログラムを考えていただけないかというのが、今のところ中心となっている。
- ・これからは試行錯誤しながら、高校側が「こういうことをしてほしい」という情報発信する中で、連携先が応えられるようなことも出てくるだろうし、ピンポイントで自分の高校の近くの大学や企業に直接交渉してやっていく。
- ・今までは、全く飛び込みで営業から始めなければならなかったことが、このコンソーシアムでは先方もわかっているので、「わかりました。では検討しましょう。」というところから始まり、そういう中で、いろいろな形の学習機会の提供が考えられると思っている。
- ・要は、連携先から提供される内容を踏まえ、高校側と連携先で調整してプログラムを構築し、実践する。
- ・一連の授業の時間の中で連携先との学習機会もあるかもしれないし、いろいろな学びの集大成として、別途、特別な時間を設けて、そこで学習機会を提供してもらったものに生徒がのっていくものもあるだろう。
- ・いろいろなバリエーションをこれから作り、そのフレームが、今やっとできあがったというところである。いくつかプログラムを提供されているところも出てきており、これから長い目で見ていただきたい。

(河野会長)

- ・状況をご説明いただいた。コンソーシアムについて何かご意見があるか。

(二見委員)

- ・神奈川県経営者協会もこのコンソーシアムに参加させていただいている。どういう関わり方をするかということを経理局の方といろいろ話したが、結局のところ、受け側と出し側の両方のニーズが合わないと、すばらしい企画、適切な教育活動にはならないという印象であった。
- ・将来の少子化、学生数の減を踏まえて、大学の方がいろいろ提供しはじめるタイミングになっているので、そちらの方からまず始まっていて、企業の方からはなかなか企画が出てこないという状況ではないかと思っている。
- ・しかし、高校の方から「こういった形での実務に関するものがありますか」というふうに聞かれれば、間に入って会員企業に検討をお願いするとか、そういった環境を作っていくことができる。
- ・すべての会員の状況が分かりきっているわけではないが、例えば、工業高校から「こうした機械の実習をさせてもらえるところがないか」と言われれば、「この企業だったらあるな」

といったことは思い出されるし、検討してもらおうよう、口利きはできる。

- ・今のところは大学から始まっているが、ゆっくりと煮詰め、具体化していけばいいのではないかと思う。

(村木委員)

- ・経営している立場から言わせていただくと、スペシャリストとかいろいろな言葉が入っているけれど、実際にいざ社会人になった時に、コミュニケーション能力が今の若い人たちはなかったりとか、免疫がなかったりとか、そういう部分の教育がどうなっているのかと思う。
- ・社会人として人間力を身につけるといふか、そういうところの教育ももう少し必要なのではないか。
- ・今の人は言われることは、高い教育を受けているのでできるが、自分で考えて何かをすることができないところがある。
- ・この前も少しお話させていただいたが、AI の時代になった時に、人間力のない人は、ポジションを奪われてしまうのではないかという心配もあるので、現状の教育現場が分からないので、どうなっているのかを教えてくださいなというところはある。

(本田委員)

- ・中間まとめに既に個別に書かれている連携先との連携というのは、今後コンソーシアムと位置付けられていくと考えてよいか。

(岡野高校教育課長)

- ・これは、ケースバイケースであり、個別の大学と高校が、あるいは高校が既存の連携先とやっていた、これはそのまま活かすつもりである。
- ・相手側がすべての高校を相手にしても良いということであれば、コンソーシアムの方に協定を結んで入っていただく。
- ・連携先がキャパ等を踏まえ、現状のまま置いておきたいというのであれば、それは継続して、無理にコンソーシアムの方に入っていただくということをしなくてもよい。
- ・基本は、今までの連携はそのまま活かし、相手方が、コンソーシアムに入ってもっと幅広く高校といろいろやっても良いというのであれば、入っていただくという感じで考えている。
- ・すでに現時点で、ほとんどの高校がいろいろなところと個別でやっているのだから、全部なくしてとか、それを全部コンソーシアムに入れるとかそういう意味ではない。

(河野会長)

- ・大学、あるいは企業、あるいはこういう機関と連携をしている高校というのは、何割くらいあるのか。

(岡野高校教育課長)

- ・少なくともどことも連携していないところはない。連携の形態がしっかりと書類を交わして、協定書という形でやっているのに限定すると、全校とは言い難いかもしれないが。
- ・そういう書類のやりとりなしにすでに連携をしているという、いわゆる事実上の連携ということであれば、ほぼすべての高校がしていると言っていいのではないかと思う。
- ・特に大学と連携し、協定書を結んでいるのが、確か 140 校のうち 90 校ほどあったと思うが、これは、わたしの記憶なので、違うかもしれない。

(河野会長)

- ・実際に、2、3回講義に行ったら連携ととらえてしまうのか。

(岡野高校教育課長)

- ・そのとおりである。協定書とか結ばなくても、近くの大学から来てもらったり、あるいは高校生が夏休みにその大学で高校向けの講座を受けるなど。そういう形がそれなりにあると思う。数としては、大学が多い。

(本田委員)

- ・コンソーシアムに関しては質問があったが、皆さんご関心・ご興味というか期待もある一方で、よく分からないという感じをお持ちだと思う。
- ・既存の連携とコンソーシアムの違いや、コンソーシアムであることによってどういう影響があるか、あるいは、今事実上でなされている連携というのは、お互いのことを見極めた上で、大丈夫そうだな、あそこの生徒ならというようなものに基づいてやっていると思う。
- ・コンソーシアムになるというときすべての高校と言ったときに、信頼関係がないところでどのようなプログラムが出るのかという、ハードルや難しさが上がるようなところがあると思う。
- ・そういう難しさや、越えなければならない課題というの、しっかりと率直に示すべきなのではないかと思う。コンソーシアムについては、追加の説明をしていただきたい。希望というか提案です。難しいようならば結構ですが。

(河野会長)

- ・次回の時にコンソーシアムについて少しまとめていただいて、ご説明をじっくりしていただきたいと思う。

### (3) 本県のこれからの専門高校のあり方について

(河野会長)

- ・中間まとめには全部の専門分野が載っており、具体的な連携と課題を含めて書いてある。特に、家庭に関する学科は、今回のひとつの目玉となっており、食の問題が出てきている。このことも含め、ご意見を伺いたい。

(廣瀬委員)

- ・家庭に関する学科の具体的な方策のところ、生徒の進路希望に対応できるかということは別にして、吉田島高校などの場合、その敷地を利用した農業系の業務とうまく合体できると、6次産業をにらんだ、非常に面白味のある教育ができる。
- ・調理そのもの自身は、専門的に答えていくと金ばかりかかってしまうので、なかなか負担かと思う。神奈川県は水産高校を持っているし、そういう部分では、いろいろな分野との連携での兼ね合いという意味では非常に面白い教育ができるように感じる。

(河野会長)

- ・そのことについて専門部会のご意見を伺いたい。農業や水産、あるいは、今の調理は化学も入るであろうから、そういうのを含め、連携するような家庭というのは、検討の中にあるか。

(大平委員)

- ・私は、元々家庭科を教えており、専門部会でも話をさせていただいているが、吉田島高校ということなので、6次産業というところも一つ視野に入れながら、農業と何かコラボレーシ



ョンができないのかというところは、特色としては考えられると思う。

- ・しかし、専門学科による家庭に関する学科なので、やはりいろいろなことをやらなければならないし、専門学科として教育課程を組んでいかなければならない。
- ・例えば、課題研究などの科目で連携していくのはすごく魅力的であり、農業と商業では、相原高校がそのような形で商品開発などをしていたので、何かの形で関わることがあったほうが良いと思っているし、期待している。
- ・厚木商業高校の近くに中央農業高校があり、同じ学区内ではあるが、少し距離があるため、そこで商品開発などの連携をすることは、厳しい部分がある。可能な範囲で魅力的な技術とか魅力的なものができると思う。

(本田委員)

- ・吉田島高校についてのことだが、中間まとめに、生活産業を通して地域や社会の生活の質の向上を担う、将来のスペシャリストの育成と書いてあるが、この書き方だけだと何のスペシャリストなのか判然としない。
- ・もう少し具体的に書いていただけないか。一体、何のスペシャリストをイメージして書いているのか。ご存知の方はお答えいただきたい。

(事務局)

- ・具体的には、それぞれの専門分野に通ずるいわゆる専門家という意味でのイメージということなので、例えば家庭科に書かれているスペシャリストは実際には、家庭科の基礎的な教育内容を踏まえて、調理師や、ファッションデザイナー、そういった専門家というようなイメージを持っているということを書いてある。

(本田委員)

- ・調理であれば、農業の中に食品加工がある。では、新たにこのバックボーンを作るといふことは、農業の中にある食品加工ではない、例えば、ファッションに重きを置かれているということか。

(大平委員)

- ・例えば、農業の食品化学、この分野と調理師の部分は、違う分野として捉えられるのではないかと考えている。調理師については、もちろんバックボーンとしては、栄養学などを学んでいるわけなので、そういうものもスペシャリストに入ってくる。
- ・それから、専門学科部会で出た話では、少子高齢化のところで保育や社会福祉もこちらの学校で検討されているとのことだったので、保育でのスペシャリストということに、一つの視点があるのかなと思う。
- ・介護は家庭介護という視点もあり、これは福祉分野と重複してしまうかもしれないが、子どもと家庭科の部分は、家庭科の生活と福祉という科目もあるので、さらにそれらを特化して、地域の方にお役に立てるようなスペシャリストというところがあるのかなと思っている。
- ・しかし、スペシャリストと言うと、先程の即戦力ではないけれど、少し厳しい表現かなというところもある。
- ・「将来の」というところであるので、進学して、専門分野を磨いて、卒業して、そして世の中に出て将来的にスペシャリストになっていくという記載をさせていただき、言葉は、検討の中で使わせていただいた。

(本田委員)

- ・そういう背景があるのならば、福祉ということであれば、福祉に関する学科が別にある。保育ということを念頭に置かれているのであれば、どういう卒業後の職業をイメージしているかを、全然知識がない者が読んでも分かるように、はっきり書いていただければと思う。
- ・つまり、説得力があまりない。なぜ、新たにこの時代に生活科学科を作らなければならないのかという説明としては、不足しているという印象を受けた。男女を問わずというのは、現代役割を強化するためのものではないということ、少し書いていただけると良いと思う。

(佐藤委員)

- ・クラス数は決まっているか。

(折笠指導部長)

- ・まだ決まっていない。

(佐藤委員)

- ・このような学科はこれから増えていくのか。

(岡野高校教育課長)

- ・当面はここでやることを前提にしている。

(折笠指導部長)

- ・全国的に少ないかもしれない。

(大平委員)

- ・全国的には減少傾向にある。審議会の立場から言うと、明確に生活科学科や家庭科が必要とされる現状認識というのを、もっと出していかないと厳しいと感じている。
- ・最終的には書いていただいた中で、「だからこうなんだ」ということを、「だからこういうものにしていかなければいけない」というところの検討ができればよいと思っている。

(河野会長)

- ・つぎに、工業についてはいかがか。

(目迫委員)

- ・具体的な方策のところ、また産業界から求められる人材を的確に捉える、中学生の進路選択における工業高校に対する意識を的確に捉え、実践的な工業教育を展開するとあるが、この文言ではなくて、少し話をする中で教育委員会にいくつか質問をしたい。
- ・中学生が工業高校に入学したいということについて、先ほど課長がおっしゃったように、個々の高校が地域の中学校や小学校と連携してやっているはずだが、県の教育委員会が県として中学校にPR活動みたいな広報活動をしているのかというのが1点目の質問である。
- ・2つ目は入学の部分だが、町内会の会長から、近所の子どもが高校に入りたかったが、レベルが高くて諦めたという話があったということを知った。その時に校長先生に、入試のやり方を聞いたら、合計点を100点とすると、調査書が60で試験が20、面接が20と言っていた。
- ・配分がどうのこうのではなく、あっているレベルで入りたい子がいるのであれば、入らせてあげればよいのではないか。
- ・要するにその工業高校に入りたい子がいるのならば、ものさしでやらなくてはいけないわけであるが、ここが専門高校の魅力だということを企業側もそうであるが、もっと底辺を広げて

PRする必要があるのではないかと思います。

(岡野高校教育課長)

- ・本県では、公私協調事業として公立高校が集まる全公立展、私立高校が集まる全私学展をスタートアップイベントとし、パシフィコ横浜にて開催している。例年3万人くらいのお客様が来ている。
- ・夏には地区別に公私合同説明相談会を行っている。各ブースは各学校の先生たちが宣伝をするのであるが、各地区のアンケート調査結果では、小学生や中一、中二といった子たちも来ており、そういう形で一斉に広報活動をしている。
- ・例えば産業教育フェアというの、小学生が来ていたりしているし、教育委員会の所管ではないが、ロボフェスタにも小学生が来ており、参加している工業高校の魅力を発信できるような機会となっている。それなりに情報発信させていただいている。
- ・入選については、最終的には、倍率が出てしまっている場合は競争試験になってしまう。一定の水準になっているから合格させるという資格試験的なことはできない。

(佐藤委員)

- ・昔は緩やかだった気がする。農家の後継ぎだったら、農業高校には優先的に、鉄工所を経営していたらとかあった。私が学級担任をやっていた時に、花屋の跡継ぎとかを入れてもらったといったら語弊があるが、その意欲とか、後継者とか、そういうところは、すごく見ていただいた記憶がある。

(目迫委員)

- ・当然、物差しはどこの社会でも必要だと思うので、入りたいというのは、ストレートには叶わない。それは試験なので仕方ないと思う。

(本田委員)

- ・現状と課題に即戦力とあるが、これは注意いただきたい。
- ・工業部門に関しての記述で目を引かれるのは、「工業系分野を学びたい中学生が、工業系高校を選択しづらい学校配置となっている地域がある」や、「地域のバランスを考慮した工業系高校の配置について検討する」というところである。
- ・地域的偏りについて、課題としてきちんと書いているのに、具体的方策が「検討する」というのは、非常に気がかりというか、のんびりしているという感はある。対策についての書き方であったり、具体的な対応策であったり、よく埋めていただきたいと思う。

(岡野高校教育課長)

- ・この書き方も、この審議会が決定機関ではない中で、審議会の報告をいただいてこういう方策をやると決めるのが教育委員会の方なので、ここでやるという形を載せると諮問機関の報告ではなくなってしまう。
- ・この文言が「検討する」とあるが、「設置する必要がある」や「設置する方向で考えたほうがいい」など、いわゆるサジェスションの形の文言になってしまうのかなというところで、こういう文言にしている。

(本田委員)

- ・いま言ってくださった「設置する方向で」などの文言でよい。ここをあまりあやふやにしてほしくないという気持ちがあり、許される範囲で強い提言として書いていただきたい。

(岡野高校教育課長)

- ・承知した。そういう意味では、全体がそういう審議会の報告、こうやるああやるという形の内容は、意識的に避けさせていただいている。逆に、審議会から強い意志としてやって欲しいという事であれば、そういう書き方をさせていただく。

(二見委員)

- ・今のお話では、工業高校の配置が産業界のニーズに十分応えられる学校配置になっていないとのことであるが、どういう点がなっていないのか。

(岡野高校教育課長)

- ・相模原地区に、かつては相模台工業高校という学校があったが、神奈川総合産業高校に鞍替えをした。この神奈川総合産業高校というのは工業高校としてではなく、その他学科ということで専門高校ではあるが、工業に特化してない学校として売り出している。

(二見委員)

- ・よくわかった。自分の学生時代の際は各学区に必ず工業高校があり、いい形で配置されていたという印象であったが、その辺の事情が理解できた。

(角田副会長)

- ・商業に関する学科のところで「ケーススタディや知識構成型ジグソー法、ディベートなど」との記述があり、素晴らしいことと思うが、全学科にこれから必要なことだと思う。商業科だけなぜ書かれたのかという気がした。
- ・専門学科では課題研究という大きな学習の機会があり、そこではすでにいろいろな探求型の学習がなされていると思うが、そこでさらに新しい学習方法を取り入れていくということは、ぜひ全ての学科で記述があってもいいと思った。

(大平委員)

- ・突出してるかなというのはもちろんあるが、実際に、厚木商業高校で、国の研究指定等があり、その中でディベートを行ったり、課題研究ではない科目の中で、知識構成型ジグソー法等を取り扱っていたということで、書かせていただいたのではないかなと思う。
- ・また、文部科学省で作成している資料には、商業高校の参考授業事例として、こういうのを突出してあげており、こういうのをやりなさいというふうに考えているのも影響力としてあったのではないかなと思うので、他学科との並びの中で考えていただければよい。

(目迫委員)

- ・最後の教育研修等の充実ということで、先生方の質的向上を図る長期研修が必要と書いてあるが、先生方の教育研修で2、3日、弊所も入れたことがあるが、私はこれが理想だと思っている。
- ・前の会議でも発言したが、実際に長期というのは2、3日ではないですね。具体的に、長期に出せるのかという単純な懸念がある。それはどうなのか。

(岡野高校教育課長)

- ・1年間、企業に行ってもらっている。

(目迫委員)

- ・特定の先生なのか。

(岡野高校教育課長)

- ・公募はしており、あとは推薦もある。いろいろな企業に行っている。

(目迫委員)

- ・年間何名くらいの先生が1年間に研修に行くのか。

(岡野高校教育課長)

- ・現状では、6から7人くらいである。

(目迫委員)

- ・そういうことも増やすということが書かれているのか。それとも、現状維持なのか。

(折笠指導部長)

- ・特に今、専門学科の先生の技術がなかなか習ってきてないというか、そういう意味で、先生方も困っている部分もあるので、できるだけ機会を増やして、スキルをきちんと身につけて指導しないと生徒は教わっても全然通じてこない。
- ・学校現場からも、若い先生はそういうのはやってきてないということで、課題認識はある。具体は別として、充実に向けてやっていく必要がある。

(目迫委員)

- ・今後、期待している。

(本田委員)

- ・全体としてこの案は、課題のところ結構具体的に書いてあって、勉強になるというか、興味深いところが多いが、それに対して、対策が対応していないことが散見される。
- ・例えば水産に関しては、一般コースの魅力が薄いとまで書かれている。その後で実習船の係留場所が本校から離れている、これは具体的な課題であるというふうに思うが、それに対する対策が書かれていない。
- ・せっかく課題としてここまで指摘しているのに、どのような対応をされるのかわからないというのが気になる。
- ・また、看護に関する学科がなぜこんなに記載が少ないのか。

(岡野高校教育課長)

- ・看護の記載について見直す。

(河野会長)

- ・課題があって方策がないというのは、方策が立てられなかったということも現実的にはあるのではないかと。必ず書かないといけないということでもないだろうと思う。

(本田委員)

- ・読む側としては、ここまで鋭く疑いを見抜き、指摘しているにもかかわらず、という気がする。

(岡野高校教育課長)

- ・中間まとめの次が最終まとめ、その過程の中でも本日いただいた意見、課題に対してあまり具体的な提言がなくても、こういう部分は検討した方がいいだろうというような話のレベルの中で対比させていくべきである。
- ・今この段階では中間まとめの際のたたきのたたきという段階なので。看護についてはもう少し書き足したいと思う。

(馬鳥委員)

- ・「人材育成のあり方」というタイトルについて、「人材確保・育成のあり方」にしていただけないか。
- ・例えば、工業高校でいうと、この中にも記載されているが、大学、工業科を出て、新卒の教員は、なかなか機械科でいうと基礎基本の旋盤の指導などが、大学の時に習ってないといけない。
- ・今、実際に職名でいうと実習助手がベテランであり、実技の指導をしている。実はその実習助手の部分については、欠員が多く、臨任が非常に多い。
- ・したがって、技術の継承というような視点からも人材確保という文言を入れていただきたいということをお願いします。

(松本委員)

- ・こういうまとめを作る時に、実際に職業高校を卒業して、今産業界で働いている人の意見やインタビューした意見などは入っているのか。
- ・実際に普通高校ではなく、専門高校を選んで良かったとか、こういう教育をしてもらえば良かったとか、卒業したばかりではなく、実際、もう 30、40 としばらく経験を積んだ人が結構いろいろな意見、改革についての考えを持っているのではないかとふと思った。

(岡野高校教育課長)

- ・想定はしていなかったが、考えてみる。ここに直接書き入れるかどうかは別としても、各分野でワーキンググループを立ち上げているので、そうした中でそういう方たちのアイデアとかご意見について書くというのは対応を充実させることにはなる。

(河野会長)

- ・即戦力という話題が多かった。そして、スペシャリスト。これもスペシャリストの捉え方、考え、印象がずいぶん違う。この2つの表現というのは少しお考えになっていただいた方がいいかもしれない。
- ・まだまだ続けたいぐらいの熱心なご意見がいっぱいで、ありがとうございます。本日いただいたご意見を踏まえて、専門部会、さらに調査・研究を進めていく。
- ・以上をもって、審議を終了させていただく。

## 9 事務連絡

◇今後のスケジュール